



流者の意識と広い作域

松平修文

大野誠夫

新
歌人群像

作風の展開

赤錆びし鉄屑のうへに冬の雨ふりそそ
ぐときこころはうるむ

裘もぼろも群れゆく街上に数かぎりな
きつぶやきのこゑ

煙草火を借ると寄りきし少年の髭伸び
て丸め持つ妖婦伝

曇天の海荒るる音女生徒も荷を負ふ人
もみなマント着る

大野誠夫（一九一四—一九八四年）の、遺歌集を含む十冊の歌集のうちで、最もよく知られるのは、昭和二十六年に刊行された第一歌集『薔薇祭』である。同集は、昭和二十一年から二十三年までの三年間の作品を収める。敗戦後の都会風俗をとおして、生の意味を問おうとするもので、短歌に物語的設定や絵画的設定を持ち込み、その鮮烈さによって、当時の文学青年たちの心をとらえた。短歌否定論に揺れた敗戦後の歌壇の立て直しに中心的な役割を果たした「新歌人集団」の結成（昭和二十二年）に参加し、近藤芳美、宮修二らと共に戦後派の代表者のひとりとして、彼



大野誠夫の著書

はこの歌集の作品の制作期から、第二歌集『行春館雑唱』(昭和二十九年刊、昭和二十三年二十八号)の制作期にかけて、論作ともにはなばなしい活躍ぶりを見せた。彼は、風俗派と呼ばれる一方、虚構派、芸術派などとも呼ばれ、反写実の旗手とみなされたが、無頼派を自認し、人生派、社会派と呼んでよい現実主義的な面も持ち合わせた。要するに様々な顔を持つ極めて作域の広い歌人であった。だが、彼の本領は、芸術派、虚構派としての立場にあって、そうした方向に彼の存在意義の大半はあった、と言ってよい。

鋭い幻視の眼

父われの記憶もいつか薄れゆきさびしさ句ふ少女とならむ

金のためにはるばるきたる春日村忘れな草を摘みつつ帰る

いづこにか木の芽匂へる廃墟には犬あつまりて墓掘りてをり

数知れぬ爬虫の背は濡れながら薔薇腐れゆく垣をめぐりぬ

迷ひきし犬をしばらく飼ひぬしがけふ捨てにゆく風吹く町に

三首目までは『行春館雑唱』から、四首目以下は、第三歌集『胡桃の枝の下』(昭和三十一年刊、昭和二十九〜三十一年)から抄出した。両歌集とも、事実や日常に立脚した現実主義的な作風と空想や狂気に充ちた幻想的作風の、二つの異なる方向が共存している。このことに関して言えば、彼は、その後もこの矛盾を抱えたまま進んだが、彼にしてみると、マンネリズムに陥ることを避けるために、反写実的手法で作品を作る一方で写生にも励む、ということになり、それは彼の持論でも

あったのである。この二冊の作品で秀歌と呼ぶことのできるものは、事実と空想との接点に成立したもので、即ちここに挙げたような作品であり、とりわけ優れたものは、「いづこにか」。「数知れぬ」のように鋭い幻視の眼の光る作品であり、心の飢えが不吉な情景として形象化された作品であった。「迷ひきし犬を」は、捨て犬の運命を詠ったもの。犬の行末を思いやる作中の私の悲しみが、結句に凝縮している。それにしても、この不運な犬への愛情は、どこから来るのか。ここで少しだけ彼の閱歴に触れておく。

大野誠夫は、大正三年三月、茨城県稲敷郡生板村(現・河内町)の生まれ。生家は、地主。県立龍ヶ崎中学校在学中に短歌を作りはじめ。昭和八年、画家を志し、郷里を出走して上京、洋画家熊岡美彦(よしひこ)などに記者として勤務。一方、九年より杉浦翠子の「短歌至上主義」に入会、約十年間同誌で活躍。昭和十九年、結婚。敗戦後の昭和二十一年、常見千香夫、加藤克巳らと「鶏苑」を創刊。東京から埼玉県浦和市に疎開。二十二年、「新歌人集団」の結成に参加。二十四年、離婚。二十七年、再婚。二十八年、同行者の常見が歌と訣別したことにより「鶏苑」を廃刊。後

大野誠夫



入間市の自宅付近にて（昭和45年早春）

雑誌として「砂廊」を創刊、同誌の編集・発行に従う（昭和三十五年、「砂廊」を「作風」と改題）。昭和四十三年暮れ、再び離婚し、浦和から入間市（埼玉県）に移転。四十七年晩秋、熱海市（静岡県）に移転。昭和五十九年二月、六十九歳で病没。

これに少し加えておかねばならないことがある。彼は、幼時から乳母を母のように慕う一方、実母とは折り合いが悪く、彼女を生憎み続けた。中学校を卒業して画家になろうと家出して上京したが、思いどおりにならずこれを断念。以後不安定な仕事を続けながら、作歌を唯一の心の支えとした。彼の一生は貧

しく、二度の離婚を経験し、家庭生活にも恵まれなかった。

そうした事情から彼は、自然に人生苦や不運な人々に目を向けることになった。彼は無用者、流者の意識を持ち続け、作歌に当たっては、素材とした犯罪者、敗者などにおのれを同化させ、小動物や植物に対してさえ、おのれを投影させた。こうした心情は、方法はさまざまであっても、彼の作歌の底流として一貫するものとなった。

栄耀のかへる日無けむその妻の美貌を
売りに市に商ふ

をとめごは老婆となりて匂ひだつ楡の

わか葉の下かげる椅子

人間のごとき感じに括られて売らるる

木々をトラックに積む

第四歌集『山鳴』（昭和四十年刊、昭和三十二〜三十六年）から三首挙げる。この歌集の制作時期は、前衛短歌運動が活発化した時期に当たる。自然主義的な近代短歌を超克しようとするこの運動に参加した若手作家たちにより早くから方法上の影響を与え、彼らと相通ずる面を持ちながら、彼の作品はこれらに現れているように、人生派的な心情を湛えているところに、特色がある。

厭世観の芽ばえ

葉はすべて棘と化しつつ世を通るころざしいつか固からむとす

第五歌集『象形文字』（昭和四十年刊、昭和三十六〜三十九年）から一首。大野は、三十六年夏から胸部疾患のため、療養生活を送った。七か月余りの入院生活であったが、彼の心理には大きな変化が現れた。死への怖れに直面した彼のうちに一種の厭世観が生まれたのである。そしてそれは、前衛短歌に対して必ずしも肯定的でなかった彼を次第に歌壇から遠ざけることになった。この一首は、その背景の事実在即して言えば、自分は歌壇的孤兒でもよい、という意味だと言ってよい。それにして、二句までの比喩の見事さはどうだろう。かつて彼の弟子のひとりであった筆者は、この作品を読むたびに、彼が「俺は、しばらく生きてゆくが、しかしいつか必ず野垂れ死にするだろう。本当の詩人は皆そうなんだ」としばしば語ったのを思い出す。その後の彼の孤独な心情の現れた作品を挙げておく。

待つものもあらしと思ふ雪雲の覆へる
森の道行くときに



ひで子夫人と（昭和56年、熱海）

いきどほるころも冷えし野の家に泪
を焼かむ炭火すらなき
いくつもの橋をわたりて物売れば徒刑
地よりもうらがなしけれ

これらは第六歌集『川狩』（昭和四十六年刊、昭和三十九〜四十二年）に収められたものである。こうした作品を作った数年後の昭和四十三年の暮れに、彼は浦和から単身人間市の郊外に移った。翌年、三人目の妻を迎え、新生活が始まったが、それまでの生活費を得るための職をなげうち、主宰する小結社のわずかの会費と添削料が、収入の全てとなった。生活は困難を極め、歌壇とも積極的に関わろうとしなかったから、心理的に追いつめられて行くのが普通だが、しかし彼は余人とは違

っていた。作歌への意欲は大したもので、「何とか生きて行ければよい。いつか生活を立て直す」と言い、意気軒昂であった。四十七年の晩秋に妻の実家のある熱海市へ移るまでの入間での四年間の作品集である第七歌集『あらくさ』（昭和五十七年刊、昭和四十三〜四十七年）から作品を挙げる。

夏の花みなさびしなかんづくかの
主殺しの家紋の桔梗

鑿殺をまぬかれしゆゑ夜も更けて厨に
啼けるひとつこぼろぎ

噴水のしぶきに架かる虹の橋風吹けば
散りひと世の錯謬

「夏の日の一」の、「主殺し」とは、明智光秀のこと。「鑿殺を」は、田畑の農薬使用を素材とし、「噴水の」は、おのれの人生を総括するような心情の吐露である。ともに厳しい現実直視と造形的骨格を持った緊密な叙法によって、絶唱と呼んでよい出来ばえを示す。秀歌目白押しこの歌集は、彼の全歌集中とりわけ優れたものとなった。だが熱海に移ってから後の大野の作歌は、次第に緊張感を失って行った。彼が歌をとおしてやりたかったのは、人間とは何か、を問うことであり、それを天命とした彼は、その答えを求め

てさまざまな方法を採用したのだったが、その広い作域は、結局収斂されることはなかった。しかしいずれの方向の歌も次第に精錬され、完成度の高いものになって行ったことだけは確かである。彼の晩年は、精神的には従来よりも安定し、概して幸福と言つてよいものであった。

水の世のほか知らざらむ浮草につきて
漂ふ割殻さびし

かかはりしあはれなる子らの顔かたち
忘れ尽くして水駅に立つ

老年の観念界に棲めるものとふれば
聖白き淫婦の足

第八歌集『水幻記』（昭和五十九年刊、昭和四十八〜五十二年）から二首、遺歌集『水観』（昭和六十一年刊、昭和五十三〜五十九年）から一首挙げる。さすがに巧いが、しかし前述したように、かつての彼の歌の特色である強い緊張感は、もはやここにはない。「割殻」は、海産の甲殻類の一種。この世に生を享けたものは、頼りない生を生きる他ない、と言いたいのだ。「あはれなる子ら」とは、水商売の若い女性たちのこと。「聖」や「淫婦の足」は、死の予感の形象化である。
（まつだいら・しゅうぶん 美術史家・歌人）